The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Gallia　64号　卒業論文要旨
Author(s)	
Citation	Gallia. 2025, 64, p. 243-244
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102166
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

卒業論文要旨

ルイ＝セバスチャン・メルシエ『紀元2440年：至上の夢』における理想社会と「計画」

阿部悠太

『紀元2440年』はユートピア的な理想社会を夢想する作品でありながら、著者メルシエは実現しえない「計画」を慣例とするフランス人を批判する。彼はそうしたフランスの性格的特徴の是正を作中で展開される政治的文脈において重要な課題に設定する。本論文では、未来の夢想と「計画」の区別がどこにあるのか、という問いを起点に、彼の「政治」にまつわる思想を踏まえ、『紀元2440年』における理想社会像の分析を通して、彼の考える理想の改革について考察する。

第1章ではまず、本作が夢による未来の描写を試みたことについて、この形式的な特徴からメルシエの「計画」に対する批判意識を分析した。また、彼の計画批判の文脈が「政治家であるべき」という主張によって政治的な文脈に引き継がれていることを指摘した。

そこで、第2章では描かれる理想の共和国の政体を概観した。ここではあらゆる既存の政治体制への批判を取り上げるとともに、彼が共和国の本質とされる自由について厳密な再定義を行っていることや民衆に参画を求めていることを明らかにした。ここには彼の啓蒙主義的な思想がうかがえる。

第3章では「政治家」の概念に立ち返り、メルシエが未来のフランスに理想社会の建設を試みた理由を考察した。『紀元2440年』に描かれるのは18世紀に対する失望と拒否反応であるが、一方で本作は、自国を本質的には共和国の実現可能性を備えたものと考える楽観的な主張を社会全体に訴える作品でもあった。

以上、メルシエが18世紀的な「計画」への批判をテーマに据えたのは実践の重視によるものであり、「政治家」とは計画の成熟と実践ができる者を指す。彼にとって、理想化とは政治化であり、ゆえに社会全体の啓蒙の必要性、とりわけ市民の動員と参画を主張した。そして、本作はまさに理想社会の建設計画を成熟させる論考であり、「政治家」の必要性を主張する著者メルシエによる実践の書であると結論付けた。

『八十日間世界一周』におけるフォッグ氏の人物描写にみる旅の影響

萩原　真優子

本論では『八十日間世界一周』の主人公であるフィリアス・フォッグが旅を経てどのような変化を遂げたのか考察した。評価の観点として、フォッグ氏にかかわる人物描写、旅の同行者（パスパルトゥー、アウダ夫人）による評価、フォッグ氏の行動の3点から分析した。論文の構成として、第一章では世界一周をする前、第二章では世界一周中、第三章ではロンドン到着後のフォッグ氏につ

いて取り上げた。

第１章では、人物描写からフォッグ氏が無駄を省いた生活を送っている様子と計画や規則に対するこだわりの強さがうかがい知れた。旅の同行者からの評価では、彼の孤独と機械のように正確な生活習慣が浮き彫りになった。彼の行動には、全財産を失う可能性があるにもかかわらず、自らの考えの正当性を証明するための賭けをする、正確さへの執着が表れている。

第２章では、フォッグ氏の価値観の変化に着目した。他者との交際は無駄と切り捨ててきたフォッグ氏がアウダ夫人のために自らの予定を変更し、共に観光までするようになっている。また、旅の初期には時間に余裕があるという理由で人命救助を行った一方で、アメリカでパスパルトゥーが行方不明になった際、旅の遅れを覚悟して捜索を決断し救出に自ら向かっている。

第３章では、フォッグ氏が他者に気を配る様子が多数見られた。賭けに負けたと分かった時、自分の今後よりもアウダ夫人とパスパルトゥーの生活のことを気にかけた。賭けに勝ったことが分かった後では、得た利益をパスパルトゥーらに分け与える一方、パスパルトゥーには本人の過失によるガス代を負担させている。フォッグ氏が計画や予定を重んじる人物であることが変わっていないものの、他者を思いやる言動が見られる点は出発前からの大きな変化である。フォッグ氏は同行者たちから寄せられた信頼や献身的な支えを受け、自らも他者に献身的で誠実な態度をとるようになったと結論付けた。